

～ セピア色の風景 ～

「建て前」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

物の本では、建て前（上棟式）での餅まきは、「散餅銭の儀」という災いをはらうため儀式の中で、餅をまくことがもともになっている。家を建てることは大きな厄災を招くという考えがあり、その厄を避けるために餅や小銭をまいて他人にも幸せをお裾分けするとある。

そんなことはつゆ知らず、村中を走り回っていた。近所の建て前はいつ頃らしいという噂を聞き、また学校で友達から近所や通学道中で建て前が近いという話を聞けば、胸が躍った。「他人に幸せをお裾分けする」とあるように、多くの人が集まりやすくするため土日に行われたのだから、学校に行っている間に終わっていたという記憶はない。

建物の四方の柱の下に、「角餅（かどもち）」と呼ばれた二段のお供え餅が据えられた。少年たちの前哨戦はこの角餅ねらいであった。早いもの勝ちなので、現場に早く行ってその柱の下に座り待った。

係の人がはしごを上り下りしながら、お払いの準備をする。司祭は本来神主さんだろうが、ほとんど大工の棟梁が行った。棟梁は祝詞をあげるが、階下には聞こえない。従ってどれだけ正確な祝詞だったか疑問だ。親父に言わせると、節回しはあるものの「あうう」とうなっているだけが多かった。そして、四方にお神酒、塩、米がまかれる。

いよいよ餅まきとなる。さるから取り出された餅、お菓子、小銭がまかれた。私が走り回った相馬の昭和30年代後半から40年代前半、餅やお菓子は袋で包まれるのはまれで、ほとんどが裸で少々の泥は払って食べた。小銭も、先の大戦後流通しなくなった古銭も含まれており、開けてがっかりということも多かった。この餅まきの瞬間が建て前のクライマックスで、お手伝いの割烹前掛け姿のおばちゃんたちも、子どもものようにはしゃいでいた。多くは、前掛けを広げて「こつこつ、こつこつ（こつち、こつち）」と屋根上に向かって叫んでいた。経験者だった私は、屋根を見上げず足元を見て落ちた瞬間、一足早くひたすら拾い続けた。手持ちが一杯になると拾えないので、素早くポケットに入れる術も身に付けた。

胸が躍った餅まき。今、私は町内会の役員だが、夏祭りのイベントのひとつとして、集会所の屋根から幸せと思いつく出をお裾分けしている。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める